

各地で話題の病害虫

キクノネハネオレバエ

学名: *Psila nigricornis* Meigen

2004年12月、愛知県碧南市のニンジン栽培ほ場でハエ目幼虫による根部への食入被害が発生した。同県においてはこれまで記録のないハエであったため、帯広畜産大学岩佐光啓教授に同定を依頼したところ、キクノネハネオレバエであることが判明した。

本種は、ヨーロッパ、北アメリカ、ロシアに分布しており、幼虫がキク科植物の根を加害することが知られている。国内では1988年に神戸で初めて採取され、1991年に国内最初の記録として発表された。これまでは国内において、本種による農産物への被害報告は無く、海外においても、本種がニンジンを加害したという報告は無い。

終齢幼虫の体長は約7mm、体色は黄色味を帯びる。成虫の体長は約4mm、体色は胸背板が光沢のある黒緑色、頭は赤黄色、脚は黄色である。

本種は、幼虫がニンジンの根部表皮下をトンネル状に食害する。根の芯部へはほとんど食入しない。また、食害は根部下方3分の1までの辺りに集中する。

幼虫の発生は、ニンジンの収穫期の12月末から2月末にかけて認められ、1月に最も多い。また、建物の陰や堤防沿いなど、風通しが悪く陰になりやすいほ場で多発する。

これまで本種による深刻な被害は出ていないが、食害により外観が損なわれ、商品価値が低下する懸念があることから、今後の発生動向に注意が必要である。現在のところ本種に対し登録のある農薬はない。



PMMoV抵抗性品種を侵す病原型によるピーマンモザイク病

病原ウイルス名: *Pepper mild mottle virus* P_{1,2,3}型

ピーマンモザイク病の病原ウイルスの一つであるトウガラシマイルドモットルウイルス(PMMoV)は、ピーマン、シシトウガラシ等の *Capsicum* 属植物を寄主とする。ピーマンモザイク病は、その土壌伝染性に対する確かな防除法が無く、防除対策として各地で PMMoV 抵抗性 (L³) 品種のピーマンが栽培されてきた。しかしながら、1999年にその抵抗性品種を侵す PMMoV の病原型が高知県で初めて確認され、現在までに茨城県、岩手県及び北海道でも発生が確認されている。この病原型が蔓延すると抵抗性 (L³) 品種は防除対策として利用が困難になる。



主な症状として、葉に淡黄色のモザイク症状を示す。また、L³ 遺伝子を持つ

ピーマン品種では葉のモザイク症状の他、葉・茎のえそ、果実のモザイク症状・奇形等の症状を示すとされている。本ウイルスは伝染力が極めて強く、汁液・種子・土壌を介して感染するが、虫媒伝染はしない。

ほ場における防除対策としては、消毒済みの種子を使用した健全苗を定植する、抵抗性品種・感受性品種の同一施設内での混植は避け、同時に栽培する場合、ハサミ等はそれぞれの品種ごとに使い分けるなどがあげられる。

本病は、早期発見が重要であるので、できるだけほ場を観察し、発生株が確認された場合、周辺株を含め直ちに抜き取り、地中深くに埋めるか焼却するなどして適切に処分する。発生が確認された施設においては、使用する器具類は他とは別とし、発病株に近い部分の管理作業は最後に行うほか、次年度は *Capsicum* 属植物の連作を避けるなどの対策が必要である。

写真提供: 北海道立中央農業試験場 佐々木 純氏